

月例研究会（2010年10月27日）

## ロサンジェルスの社会運動 ユニオニズム

鈴木 玲

ロサンジェルスの社会運動ユニオニズムについて、現地調査（科学研究費プロジェクト「日本とアメリカにおける社会運動ユニオニズムの比較調査研究（研究代表者：高須裕彦氏）」の研究分担者として）および関連文献に基づいて報告した。

社会運動ユニオニズムの最も重要な特徴は、労働運動が経営者に対する影響力の行使を労働者の職場や労働市場での交渉力よりも、労使間の紛争を労働問題ではなく社会問題として捉えなおし、それを地域や社会に説得的に訴える能力に頼っていることである。具体的には、労働運動は労使紛争（組織化キャンペーンや協約改定闘争など）における労働者の立場について地域住民や社会一般から支援や共感を得て、住民運動や社会運動団体と協力・同盟関係を結び、労働者側が有利な労使紛争の解決をするように経営者に社会的圧力をかける。このような労働組合と住民・社会運動団体の連携がどのような条件の下で相対的に長期的に継続するのか、という問題意識をもって現地調査に臨んだ。

今回の現地調査では、問題意識に対する明確な解答は得られなかったが、ヒントは得られた。ヒントとは、①もともと労働者の職場交渉力が弱い、あるいは職場が安定していないので、労働者の職場の「内在的」な交渉力は弱く、社会的な「外在的」な影響力に頼らざるを得ない、

②組織間のネットワークが確立しており、その中で連携関係形成に主導的役割を果たす組織（LACFL, LAANE）が存在する、③一部のアクティブな組合（HERE, SEIUなど）では、新たな組織化の際に地域組織と連携することが組織化戦略のレパートリーとして定着している、④組合やワーカーセンターの活動家が若い層から輩出され、組織を渡り歩いてキャリアを積む人的ネットワークがロサンジェルスには形成されていること、である。同時にロサンジェルスの社会運動ユニオニズムに「弱点」があることにも気づいた：①移民労働者や他の未組織労働者を組織する組合は、HEREやSEIUなどの少数の活発な組合に限られている、②労働組合とワーカーセンターとの連携がまだ本格化していない、③縫製産業のような衰退産業の労働者に関し、労働組合が組織化をあきらめ、またワーカーセンターが財団から資金を得られない場合、その産業の労働者に対する組織的な支援が弱体化すること、である。

Ruth MilkmanやKaren Brodtkinなどのロサンジェルスの労働運動に関する先行研究を検討した後、最近成功したロサンジェルスの組織化事例（HERE ローカル11が行ったロサンジェルス国際空港（LAX）の近隣の13のホテルに対する組織化キャンペーン）および、現在進行中の注目されている組織化キャンペーン（“CLEAN Carwash Campaign”と呼ばれる全米鉄鋼労組が支援する車の洗車場で働く約1万人の移民労働者の組織化）を挙げ、そこでの労働組合と住民組織・社会運動団体の連携関係、または労働組合とワーカーズセンターの連携関係を検討した。そして、前者の連携はかなり組織化の「レパートリー」として確立しているものの、「後者」の連携はまだ「実験段階」であることを指摘した。

（すずき・あきら 法政大学大原社会問題研究所教授）